



雪の女王 The Snow Queen (1980) ジョー
ン・D・ヴィンジ (同
部宏之訳) 早川書房
(9/30刊・¥2300)

アンデルセンの童話『雪の女王』のストー
リーを下敷きにした、同題の（しかも六百頁
近く）大冊が本書である。惑星ティアマッ
ト、そこは百五十年の周期で、二重星である
太陽、〈夏〉と〈冬〉がめぐってくる。〈冬〉
の支配者、冬の女王アリエンロードは、その
永遠の支配をねらって、クローンのムーンを
つくり出す。物語は、そのムーンといとこの
スパークスを中心に、密輸業者や警官らの異
星人がからみあい、進んでいく。

アンデルセンを、そのまま異星の物語に置
きかえたもので、この作品、実のところクロ
ウト受けはあまりしなかった。しかし、その
分りライトとして、安心して読めるわけだか
ら、ヒューゴー賞を受賞した理由も、それな
りに納得できる。同年の候補作『デイトウェ
イ2』や『リングワールドふたたび』など、
ビッグ・ネームの続篇を押しつけて、寡作な
ヴィンジに賞が贈られたのは、安心感が要因
だろう。それからもう一つ、最近のSFで
は、どうも『ロマンス』の雰囲気があるとい
うことが、ファンの支持を集める結果につな
がるらしい（これは半分批判で半分賞讃――
ロマンスが嫌いなわけではないのです）。（後）